

## 教育と研究の融合の試みとしての台湾研修

渡会環（外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻）  
福岡千珠（外国語学部国際関係学科）

### 台湾研修実施の経緯（渡会環）

平成25年3月10日より14日まで「台湾研修」を実施した。研修に参加したのは外国語学部の学生6人で、ヨーロッパ学科の渡会と国際関係学科の福岡が引率した。

台湾研修は、平成24年度と25年度の二か年に亘り愛知県立大学理事長特別教育・研究費の交付をうけた事業「愛知県立大学発信型国際研究の実践」の一環として行われた。本事業では、日本で展開され始めたばかりの「ミックス・レース（mixed-race）」研究について日本、台湾と韓国の研究者と共同研究をすすめながら、複数の民族的背景を持つ人々も加えて多文化共生社会を日本でどう実現していくかについて本学の学生とともに考察し、その提案を国際社会に向けて発信することを目指している。

事業開始の24年度は学生の中に「人種」についての問題意識を高めることを目的に、「人種」について考えるための文献・映像資料の図書館での特別展示、映画鑑賞会と読書会を開催した。これと並行し、国内および国外の研究者と研究会を行った。多文化共生というテーマはこれまで一国内での研究が一般的であったが、本事業には台湾と韓国の研究者が参加している。両国におけるマイノリティの社会への包摂や排除についての報告を行ってもらうことで、日本の多文化共生社会の在り方について広く考察している。台湾、韓国も日本と同様、近隣のアジア諸国からの移民の流入が近年著しい。その一方で違いもある。6月に韓国で開催した研究会で明らかとなった違いとは、日本と韓国では単一民族国家観が強いが、度重なる人の移住によって歴史がつくられてきた台湾では多民族国家観がみられるという点である。そのうえ台湾は地理的にも東アジア、東南アジアが接する位置にあるために多様な文化の交錯点となっている。日本や韓国よりもはるかに多文化化している台湾は本事業で考察する人種や民族の交錯の最適な事例であると思われた。韓国の次の研究会は3月に台湾で開催することが決められたが、本事業はそもそも教育への効果を期待するものであるため、研究者のみが参加した韓国での研究会のような開催形態ではなく、本学の学生が主体的に参加するような研究会ができないかと考えるようになった。

そこで、本事業に参加する世新大学夏曉鵬教授に相談し、世新大学の学生と本学学生の合同ゼミを企画した。本学学生が台湾の多文化共生に関するプレゼンテーションをし、世新大学学生がコメントや意見を述べるといったチャレンジングな内容とした。合同ゼミへの参加者は、この企画の告知が行われた映画鑑賞会や読書会など一連の本事業の企画に意欲的に参加していた学生の中から選抜した。選抜された学生は勉強会を立ち上げ、文献資料を読んで台湾について調べ始めた。

本稿では、台湾研修の報告から教育および研究の面での効果を明らかにするとともに、浮かび上がった課題について今後いかに取り組んで教育と研究の望ましい融合を図るかについて考察したい。

### 台湾での「合同ゼミ」の成果と課題（福岡千珠）

ここでは、世新大学の学生および大学院生との合同ゼミとその準備について述べたい。世新大学との合同ゼミの当初の目的は以下の通りであった。

- 1、現代台湾社会の民族的・言語的多様性について認識すること
- 2、台湾の学生からの質問を受け、現代日本社会について、また自分自身について再認識したうえで、自分の言葉で話せるようになること
- 3、学生たちが台湾の学生との議論を通じて、相互理解を促進すること
- 4、学生たちがパワーポイントを効果的に使い、英語でプレゼンテーションを行うこと
- 5、教員がPBL型教育の一環として、学生のリサーチおよびプレゼンテーションをサポートする術を学ぶこと。また他大学との合同ゼミをオーガナイズする方法論を学ぶこと

しかし、合同ゼミを終えた今振り返って考えると、2「台湾からのまなざしを認識し、現代日本社会について、自分自身について話せるようになること」が、教員にとっても学生にとっても、最も重要、かつ最も達成困難な目的であったように思う。

学生たちは日々大学で様々なことを「知る」。とりわけ外国語学部の学生は、外国の事例について多く「見」

「聞き」し、それらについてレポートや論文を「客観的に」「書く」。しかし、学生の多くは、「知る」主体、「書く」主体としての「私」を問うことはまれである。レポートを書く際、彼らはいくまで「学生」として書き、研究対象に対する自らの立場性を問うてみることはしない。しかし、今回の合同ゼミでは、実際に台湾に行き、台湾の学生たちとテーブルを囲んで、台湾に関するテーマについて議論をする。台湾の学生たちの前で台湾や台湾の人々について発言するという行為は、必然的に、その発言をする「あなた」とは一体誰なのかを問われることにつながる。「あなた」は一体どういう立場から発言しているのか。「私たち」について述べている「あなた」は一体どういう人間なのか。「あなた」はこれらの問題に対してどう関わっているのか、あるいは関わっていないのか。こうした問いと向き合ってはじめて、台湾と日本の二つの大学の間で行った合同ゼミが意味を持つものになるはずである。しかし、今回、教員も学生も「自分の立場性から語る」ことの難しさを痛感させられることとなった。

ここで、合同ゼミ開催の場となった世新大学について触れておきたい。世新大学は1956年に「世界新聞職業大学」として設立され、1999年に「世新大学」と改称された。名前が示すように、当初はジャーナリスト養成のための専門学校として、著名なジャーナリストであった成舎我 Cheng She-Wo によって設立された。自身が活動家でもあった成舎我が、戒厳令下の台湾で反体制的な知識人たちに表現の場と雇用を与える意図もあったそう

で<sup>1</sup>、現在でもジャーナリズムやメディア研究が盛んな大学として有名である。

今回、合同ゼミを共にオーガナイズしてくれた夏曉鵬(Hsin-Chuan Hsia)教授は、世新大学人文社会学院の社会発展研究所所長でもあり、また、新しく設立された大学院の「インター・アジア研究国際修士プログラム」のコーディネーターでもある。同プログラムは、「方法論としてのアジア、対象としての世界」をテーマに、エリア・スタディーズとしてのアジア学ではなく、アジアから世界をまなざす新しいパラダイムを確立し、「西洋を世界と同一視するという学界における隠れたルールを打開」することをめざす意欲的なものである<sup>2</sup>。夏曉鵬教授ご自身も、台湾の新移民女性や原住民族<sup>3</sup>のエンパワメントに長く取り組んでこられたが、このプログラムも、学問としての研究に収まらず、研究者・大学院生自らが戦略的・能動的に様々な草の根運動に携わることによって、あるいは当事者自身がこの大学院プログラムに参加することによって、「社会発展 Social Transformation」を目指す大変刺激的なものであった<sup>4</sup>。

当初、合同ゼミは夏曉鵬教授が担当する「移住 Migration」の授業を開放し、議論はその授業の受講者と日本からの参加者によって進められる予定となっていた。しかし、その後、いくつかの変更が重なり、結局、台湾からの参加者はほとんどが「インター・アジア研究国際修士プログラム」の受講生、つまり大学院生や社会人となった。当初は、世新大学の参加者からも日本社会について質問を準備してもらい、日本からの参加者がそれに応える時間も予定していたが、その変更によって実現できなかった。日台の相互理解をも目標の一つとしていたため、その点については残念であった。

日本からの参加者は、愛知県立大学の3回生6人である。2012年度後期に数回行われた「人種」に関する勉強会に特に意欲的に参加していた学生たちの中から台湾研修参加メンバーが選抜された。学生たちは、スペイン語圏専攻、ドイツ語圏専攻、英米学科、国際関係学科に所属しており、中国語も誰一人として話せず、また全員台湾についてはほぼ何も知らないゼロからのスタートとなった。

2013年1月中旬、顔合わせも兼ねた打ち合わせを行い、2月上旬には台湾の基本情報について互いに確認し合った。2月下旬に行われた勉強会では、教員も含めた参加者全員が、台湾に関する論文を読んで発表した。この段階では、「日本統治時代の歴史」「原住民族」「日本語で書かれた文学」「郷土言語教育」「帰属意識の変容」「新移民」など多岐にわたるテーマが取り上げられた。この日の読書会終了後に、参加予定者同士で話し合い、テーマごとに2つのグループに分かれることとなり、最終的に、「台湾のアイデンティティ」と「台湾における結婚」というテーマで2つの発表グループが作られた。ただし、「アイデンティティ」というテーマを選んだグループは、原住民族、日本語で書かれた台湾文学、帰属意識の変容といったまったく異なる問題関心を持って集まっており、「アイデンティティ」という多様な意味や文脈で用いられる用語をテーマとして掲げたため、具体的に何を考察していくのかコンセンサスがないうまま、その後長く迷走することとなる。テーマ選びの段階では、学生・教員とも台湾の社会や歴史の複雑さや新しく知る用語の多さに途方に暮れるところがあったように思う。当初の目的である「自分自身について再認識」することよりも、台湾の事実関係を把握するだけで精いっぱいだったのがこの時期である。

三月に入ると2つのグループに分かれてプレゼンテーションと内容の練り直しを繰り返した。そこで大きなハードルとなったのが、前述した立場性の問題であった。発表する2つのグループに対して、教員からのコメントとして繰り返し投げかけたのが、「透明人間にならないこと」、「日本を代表しないこと」、つまり様々なレベルで自分がどういう立場から発言するのか意識することであった。台湾の歴史と日本の歴史は決して切り離すことはできず、また現代においても台湾は日本と深い関わりがある。また、日本社会にも多様性があり、あなたの考える「日本」は、別の人の考える「日本」と同じかどうか分からない。台湾の

人々と同じ時代に日本社会で生きているものとして、自分は何ものであり、どういう立場から話すのかを明確にすることが重要であると繰り返し述べた。しかし、台湾について「調べる」という段階から、台湾の人々との関係性において自分の立ち位置を問いなおしてみようという段階への移行は、教員にとっても学生にとっても予想以上に難しいものであった。

発表当日、世新大学に足をふみ入れたのは夕方5時頃であった。台湾では新学期が始まったばかりということで、キャンパスはたくさんの学生があふれ活気に満ちていた。台湾の大学に足を踏み入れるのは皆初めてで、学生6名と教員2名で興味深くキャンパス内を散策してまわった。7時頃、合同ゼミの会場となる教室に到着した。7時をすぎないと来られない参加者がいるとのことで、夏曉鵬先生が「インター・アジア研究国際修士プログラム」のビデオを上映してくれた。そして、台湾側の参加者の自己紹介から合同ゼミは始まった。台湾側の参加者は予想を上回る13名であり、その多くは、上記の修士プログラムの参加者であった。うち二人は、TASAT(Trans-Asia Sisters Association, Taiwan)という台湾の新移民女性の団体のメンバーであった。

「結婚」グループのプレゼンテーションでは、台湾の四大族群（四大エスニック・グループ）といわれる原住民、閩南人、客家、外省人に加え、新移民という五つのエスニック・グループを取り上げ、エスニック・バウンダリーを越えた結婚が増加したことを指摘した。そのうえで、質問1「他のエスニック・グループの人と結婚するときはためらいますか？」質問2「両親は同じエスニック・グループ出身ですか？」などの用意していた質問を投げかけた。台湾からの参加者からはさまざまな解答があった。他のエスニック・グループの人との結婚をためらわない、という解答が多かったが、年齢的に結婚について具体的に考えることが難しかったのではないかという印象も受けた。そんな中、TASATからの参加者であったタイ人女性からは、東南アジアからの結婚移民は台湾では自由に仕事にも就けないこと、そのことが国際結婚を困難にしているとの発言があった。

話が両親世代に及ぶと、両親が異なるエスニック・グループ出身であるという発言が相次いだ。例えば、一人の原住民族系の男性は、母は客家だが、父方の祖父母は原住民族の一つタイヤル族と閩南人であると述べた。また、同じく原住民族系の女性は、父は台湾最大の原住民族であるアミ族、母は台南出身の閩南人であり、家では閩南語、国語（中国語）、アミ語が話されていたと述べた。彼女自身は国語と閩南語、アミ語、日本語、英語を話すそうである。一つの家族の中で様々な言語が用いられていることは大変興味深く、食習慣や祭祀、日常で用いる道具などについても違いがあるのかについても興味がわいた。参加者の大谷さんの報告にもあるが、結婚というトピックはトピックが具体的であり分かりやすい一方で、結婚の話からさらにエスニシティやナショナリティの話へと話が進展せず終わったのが少し残念であった。

次のグループは「台湾性」について発表した。アイデンティティをテーマとしていたこのグループは、最終的に台湾の諸言語と「台湾性 (Taiwaneseness)」との関連に発表の焦点を絞っていた。このグループのプレゼンテーションにおける仮説は以下の通りである。「台湾性とは、中国と台湾との間に、また中国に対して示される差異である」、「台湾で話されている言語（国語、閩南語、客家語、原住民族諸言語）のうち、台湾性を最も示すのは閩南語ではないか」。また、それらの仮説をふまえ、「閩南語を国語（中国語）に次ぐ、第二公用語とすべきではないか」という問いを投げかけた。閩南語とは、台湾語とも呼ばれる福建系の言語である。<sup>5</sup>

これらの問いかけに対する台湾側の参加者からの解答は、予想以上に真剣なものであり、また多様なものであった。台湾語とも呼ばれる閩南語が「国語」の次に広く話されているのは、参加者のほとんど全員が認めるところであった。しかし、閩南語が「台湾性」の指標となるのではないか、第二公用語とすべきではないか、という問いかけには異論が相次いだ。それらの意見は主に以下のような4つに分類できる。

1、「台湾性」の構築という概念そのものに対する違和感。閩南語をことさらに台湾固有の言語として強調することは、中国からの独立あるいは差異化をはかる民進党の方針であったとし、そうした方針に対しての距離感が直接的・間接的に述べられた。

2、台湾の言語的多様性の認識。閩南語は台湾で話されている多くの言語のうちの一つであるにすぎない。閩南語を新たな公用語とし、優位な地位に位置づけることは、諸エスニック・グループ間にさらなる分裂を生むだけである。また、台湾では、日本統治時代には日本語、戒厳令時代には国語を強制されてきた歴史があり、新たな支配の歴史を作ることはしたくない。

3、閩南語に固有の性質。閩南語は台湾語とも呼ばれ、「裏の実質的な公用語」という側面も持つ。一方で、台湾の閩南語は、中国福建省で話されていた閩南語から派生した言語であり、同じ言語は福建省から移住した人々が多く住むシンガポールやタイ、マレーシアなどでも話されている。閩南語は、それらの国々との連続性を示しこそすれ、差異性を示すものではない。

4、新移民の女性からの視点。東南アジアからの移民は、中国語や閩南語の習得に苦勞をする。また、台湾人の間に生まれた子供たちは、親世代と異なる言語を話すことになり、家庭でのコミュニケーションが困難

となる。閩南語を台湾の公用語とすることにより、今以上に特定の言語の押し付けの傾向が強まるのは問題である。

こうした議論からは、「アイデンティティ」グループが提示した「『台湾性』と言語」というトピックの問題点も浮かび上がってきた。上記の1にあるように、「台湾性」についての問題は、政治や外交、とりわけ中国との関係性の面で台湾の将来的な方向性をどう定めるのかという問いと不可分である。後者の点に言及せず、言語に対する意識ばかりを問うこと、また「台湾性」という概念そのものを問うことなく、それを議論の出発点にした点は不十分であったといえるだろう。参加者の多くは「（『台湾性』に重要なのは）言語ではない」というセリフを口にしたが、その言葉には言語のみから「台湾性」を問うことの不十分さの指摘がこめられていたのではないか。

この議論全体を通して、台湾からの合同ゼミの参加者の多くは、原住民族や新移民をはじめとする台湾社会のマイノリティについて高い意識を持っていることがうかがえた。また、エスニック・マイノリティの間に優劣が生じることを強く懸念する人も多く、不平等を是正するためだとしても国家の積極的な政策を望まない声が多かった。こうした意識の高さは、まさに草の根から社会の変革を目指す大学院コース参加者ならではの、「我々（の意識の持ち方）は例外的で、台湾社会全体でみるとまだまだ（マイノリティ問題に）意識が低い」とは参加者の一人の弁である。しかし、台湾からの参加者の台湾社会への意識の高さに驚かされた一方で、彼らが台湾社会の外側に向けて発言してゆく際に拠って立つ自己認識とは何だろうと考えさせられたのも事実である。台湾から発言する際に、世界中に広がるネットワークの存在をふまえて台湾ローカルの「漢人」として発言してゆくのか、あるいは世界中に存在する先住民族の一員として発言してゆくのか。また、ポストコロニアルな存在としての「台湾性」を追求するのか。そうした問いを投げかけるためにも、台湾についてのみではなく、日本のナショナリティの問題についても、相互に検討できればより豊かな議論ができたであろう。日本の学生たちは日本のことについて聞かれるとなかなか発言できなかったが、この議論を通じていろいろと考えさせられたようである。しかし、台湾の参加者の前で、英語でプレゼンテーションを行い、議論すべき仮説を提示する、という難しい課題によく取り組めたと思う。

最後に、筆者にも反省がある。普段アイルランドにおけるナショナリズムを研究しているため、学生たちと台湾のナショナル・アイデンティティを考える際に、あまりにも西洋由来の国民国家モデルを念頭に考えてしまったのではないだろうかという点である。一民族一国家という概念をもとに「共通の神話と歴史的記憶」や「共通の文化」を持つことを重視する西洋の国民国家型のナショナル・アイデンティティと、中国のそれとは大きく異なる。夏剛（2003）が指摘するように、中国語では国家・民族・国民の間には明確な区別があり、それらの意をかねる「ナショナル」に相当する語はない。夏は、中国人意識は、「国家」と「祖国」への帰属意識、また「民族」と「国民」の意識が複雑かつ重層的に組み合わせられたものであるとする。国民国家モデルで考えた場合、理解しにくいのが、「広義の中国人」、つまり華人としての意識である。華人としての意識は、国籍は基準とならず、①黄帝・炎帝の血統であることを否定せず②漢字文化を尊重し③家族の団結を重視することによっておおまかに定義できるとされる。国籍が重視されないため、「籍を置く外国に奉仕しつつ祖国に連帯感を持つ姿勢」（131）や、「国家嫌いの祖国好き」（131）に代表されるような「多重の忠誠」はよく見られる傾向であるという。そのような「混合・重層が常態であり本質である」（117）広義の中国人アイデンティティのあり方は、国家を重視し、文化的差異と同一性の構築によって「国民」意識を作り出してゆく西洋のそれとは大きく異なる。「多重の忠誠」や「国家嫌いの祖国好き」が現代の台湾の人々にも見られるかはさておき、上記の違いをふまえて「台湾性」についても考えるべきであった。

若林（2001）は、現在の台湾は事実上、圧倒的な「漢族優勢社会」だと指摘している。本省人、原住民族の言語的同化、つまり「国語」の普及はほぼ完全に成功した。原住民族の言語は、祖父母世代には話されているが、それ以降の世代には継承されていない。また、原住民族は都会に出、本省人、外省人との間の通婚が進み、「漢化」が進んだ。若林は、「中国化」が十分に進んだうえで、民主化と経済発展に伴い、文化的多元性に「寛容」になっているのが今の台湾の傾向なのではないかとみている。「漢族の経済的権益にかかわるもの以外」に限って、原住民族の権利が実現されていったとの指摘もある（若林 191）。若林の議論をふまえ、「混合・重層が常態であり本質である」（117）広義の中国人アイデンティティのあり方を台湾にもあてはめるとすれば、「台湾性」を理解する際にも、「共通の言語」や「共通の文化」によって構築される「台湾性」よりは、圧倒的多数派の漢族の文化と客家や原住民族など少数派民族の文化の微妙なバランスと混交の上に成り立つ「台湾性」を想定するべきだったのかもしれない。

以上のように、世新大学との合同ゼミは、「アジアから世界をまなざす」という言葉の意味を、学生にも教員十分に考えさせてくれる、大変有益なものであったといえる。

## 相手を「知る」ということについての再考（渡会環）

前節で問題提起された「相手を『知る』」ということとは、地域社会において多文化共生をすすめていくために欠かせない行為である。本研修を通じて、相手を知る前に「自分」という主体を知ることの重要性に気づかされたのに加え、相手を「知る」ための方法についても再考する必要性を実感した。方法として考えられるもの、そしてその方法を学生が身に着けるために教員ができるサポートについて、ここでは考えてみたい。

台湾研修では、合同ゼミのほか、台湾について「知る」ための3つのプログラムが組み込まれていた。台湾滞在初日には台北市のベッドタウンである新北市にてアミの男性に文化の伝承や民族観についてお話をうかがうという「お話会」、滞在2日目には原住民族文化復元施設「九族文化村」の見学、4日目には市内観光があった。「知る」ということのむずかしさを痛感させられその方法について考えさせられたのが、初日の「お話会」である。

この「お話会」は、台湾でアミのカトリック実践について現地調査をしている日本人院生に協力してもらった。彼女の知人のアミの男性を紹介してもらい、彼の住むマンションの集会場で彼女の通訳を介してお話をうかがうことになっていた。勉強会を重ねる中で学生は台湾の原住民族に強い関心を持ち彼／彼女らに実際に話をききたいと考えるようになった。様々な原住民族がいる中でお互いをどのようにみていてそしてどのように共生をしているのか、という点について強い関心を持っていた。「お話会」としたのは、台湾の原住民族について専門的に学んでいない学生と教員がそのことで尻込みしてしまうのではなく率直に「知りたいこと」を「知る」機会となることを期待したためである。

そんな学生と教員がアミの文化をそして彼らのことを「知る」ことができるよう、男性と奥様はお話会を準備してくださっていた。集会場のテーブルに3種のアミの伝統料理を並べ、男性の趣味であるカラオケの電源を入れて待ってくださっていた。ところが、それらの準備が学生と教員には「想定外」のこととして映ってしまったのである。学生も教員も日本で準備した質問をしてアミの文化と彼らのことを「知る」つもりでいたためである。

男性が好きな日本の演歌を彼も院生もそして教員も歌い、アミの伝統料理の感想を言いながら時間が過ぎていくことに、学生も教員も「戸惑い」を感じていた。その戸惑いを察してか、ご夫妻はソファに座り直した。カラオケのときは異なる真剣な面持ちで、「どんな質問をしたいのですか」とたずねた。それで学生も教員も「やっと質問ができる」と安心したのではなく、これでお話会の雰囲気が変わってしまったことにまた「戸惑った」。奥様からは「あなたたちはこういうことがしたくはないの、アミの言葉を学びたくないの」という質問も投げかけられた。学生も教員も何を知ろうとしてここにきたのか、そんな根本的なことが分からなくなっていた。結局学生は日本で準備した「知りたいこと」を質問した。だが、日本で準備した質問も、男性にアミを代表させて答えることを求めるものばかりで、それに対して困惑した男性からは「私の意見をきいているのか、アミの全体のことを知りたいのか」と何度も確認をされた。

こうして「お話会」は終わった。学生も教員もあの奥様からの問いに対してなぜすぐに答えることができなかったのか、お話会のやり方に「戸惑い」を感じてしまったのはなぜなのかを自問するようになった。答えを見出すには時間がかかった。反省会と報告会の準備を通じて、準備してきた質問をすることで相手を「知る」ことができると考えていたことが、本来求めていた相手を「知る」ことへの障害となっていたと学生は分析した。このときようやく、学生と教員が「もてなし」と捉えた男性とご夫妻の行為も「もてなし」ではなく、「知る」という機会の提供であることに気がついた。また、カラオケも、男性の趣味だからではなく、趣味を通じてお互いを知り、打ち解ける機会だったのではないだろうか、と。質問をすることばかりを考えていたために、相手が示してくれた別の「知る」方法に対し柔軟に対応することができなかったのである。かといって、「知りたいこと」を質問して相手を「知る」ことができたかといえばそうではない。結局は、参加学生の大上さんの報告にあるように「アミの方の『私たちのことを知ってほしい』という気持ちに対して私たちはほとんど応えることができ」なかったということにもなってしまった。

実は、ご夫妻にふるまっていたいただいた料理や教えていただいて皆で踊ったダンスで感じたりリズムこそが、後日訪れた九族文化村や博物館の展示の理解に大いに役に立った。緑豊かな谷間に位置する九族文化村の施設をまわる中で「こういった緑の豊かなところで狩猟や採集をした後にアミの人はあの伝統料理をつくっているんだろうね」、ダンスのデモンストレーションをみながら「お話会で踊ったダンスだ。ダンスは一体感が生まれるね」と学生は話しながら、お話会でご夫妻が提供してくれた「知る」方法に感謝し始めていた。お話会でのコミュニケーションがうまくいかなかった一つの原因は、限られた時間の中で効率よく「知る」ことばかりに意識がとられ、質問という「知る」方法に対して学生も教員も無批判だったことである。

また、「知りたい」ことも不明瞭だったといわざるを得ない。奥様にはそこを問われたと考える。また、用意した質問が抽象的すぎたり現実的でなかったりしたときに言い換えることができなかったのは、知れた

いことの意図を明確化できていなかったためと学生は分析している。教員は事前に学生の間で質問をする・答えるというシミュレーションをさせて、学生が質問の意図を明確化したり適切な表現に言い換えができるよう指導すべきであった。このようなシミュレーションは前項で問題提起された自分の立場性を認識するという訓練にもつながると思われる。今後は講義やゼミで積極的に取り入れていきたい。

最後に、相手を「知る」ことの難しさ、特に「知る」ために相手と築いておくべき信頼関係の重要性について教員は学生に十分に理解させておく必要があったと考える。インフォーマントに話をきくのは相手との十分な信頼関係を築いてからというのが文化人類学の大前提である。今回のお話会は日本人院生とアミの男性との信頼関係によって、また原住民族に話をききたいという学生の願いに対する男性の理解によって実現した。学部生のときから台湾に何度も通い、日本人院生は男性を今では「Mama（お父さん）」と呼ぶほどの関係を築いている。教員は事前に日本人院生を通じて男性の情報を少しでも多く事前に得ることで、初対面でもコミュニケーションがスムーズにいくようにしようと考えた。プロフィールや趣味などをメールで教えてもらった。学生もその情報を参照したうえで、これまで勉強会で疑問に思った点などを質問にまとめた。それで教員も学生も男性との距離を「埋めた」と誤解した。筆者は、個人研究においてインタビューや参与観察を主たる手法としており、相手のことを聞く前にまず相手との信頼関係を長い時間をかけて築くことの重要性を認識している。自身のフィールドワークの体験から学んだことを教員が学生にしっかりと伝えるべきであった。そして、信頼関係が構築されていない中でお話会に臨むという状況を学生に問題として意識させ、そうした不利な状況の中でできる最善の「知る」という方法について教員とともに検討すべきであっただろう。

相手を「知る」という行為一つをとっても、台湾研修を通じて、その主体の立場性の認識、方法の検討、相手との信頼関係の構築などの課題が浮かび上がった。既に述べたように、これらの課題については、何もフィールドで取り組むものではない。フィールドに出かける前の、本学のキャンパス内での教育で指導していきたい。

#### 本研修の成果と今後の事業への活用（渡会環）

本研修は、帰国後の4月19日に学生主体で開催した「台湾研修報告会」を経て終了したと捉えている。本研修の教育効果もこの報告会があって一層高まった。報告会は合同ゼミの準備についての説明や英語のプレゼンテーションの実演も含みながらも、「この研修を通じて自分が何を学んだのか」を報告することに力点が置かれ、学生主体で準備が進められた。その作業を通じて、学生は台湾滞在中に感じていた「失敗」や「心にひっかかったこと」を今後の学びやキャリア形成に活かす点として建設的に考えるまでになった。

お話会と合同ゼミの直後に「反省会」は開いていた。だが、学生は、お話会では「（話の）流れが悪くなった」、合同ゼミでは「むこうが流れをもっていったしまった」といった感想にとどまり、研修で浮上した課題の分析はできていなかった。報告会を経て、さきほどの語りも「流れが悪くなったのは自分が質問したいことの意図を把握していなかったから」、「流れにもっていられるのではなく持っていくにはまず、自分の立場を認識した上で自分の意見を言うトレーニングを常日頃からすることが必要」との語りへと変わるようになった。この語りの変遷から、本研修が学生のコミュニケーション力の向上に寄与したことが分かる。また、巻末の学生報告では「自分の立場を認識する」と「自分の意見を言う」ことを学生は「多文化共生の第一歩」として捉えており、多文化共生社会の実現に将来彼らが寄与することを期待させるものである。

研究面での成果も大きい。特に、世新大学の学生と教員の意見は、日本での多文化共生の在り方を再考する上で考慮すべき点を明示してくれた。文化面では多様性がより許容されつつあっても政策面では異なっていることへの問題意識をもつこと、多文化共生政策が特定の人々に不利益を生じさせてしまう可能性がある場合に我々はどのような考えを持って行動するのかを明確にすること、である。

こうした台湾研修での成果は、報告会によって他の学生と共有できた。当日は、学生6人、教員が5人、職員が1人の参加ではあったが、学内に掲示されたポスターをみて自発的に参加した人ばかりであった。「中国学科なので台湾について関心がある」のはもちろん、「先輩の活動について知りたい」、「こんな企画が県大で行われていることに関心をもった」など、参加の理由は様々であった。報告会で回収したアンケート（自由回答）には「講義を受けるだけでなく、自分で調べて行動して調査するのが1番成長するし、理解が深めるんだなと思いました」（3回生・女）、「直接台湾のみなさんと交流され、今後の意識が大きく変わっていかれると思いました」（科目等履修生・女）という記述があり、学生が多文化共生の在り方について自主的に調べて考えるという事業の目標が第3者にも評価されたことが分かった。台湾研修を通じて参加学生が得た成果については今後、25年度より本格運用されたクラウドサービス manaba を使って発信するなど、より多くの他の学生と共有していきたいと考えている。

## 学生の声—台湾研修で得たもの—

総括（スペイン語圏専攻 眞野綾）

私たちは昨年度より、この台湾研修旅行に向けて台湾に関する勉強会を行ってきた。勉強会は、台湾についての知識が全くない段階から始まった。そのため、まずは台湾の主要都市や言語、簡単な歴史といった基礎知識の学習から始まり、以降それぞれが特に興味を持った分野を中心に調べ、徐々に知識を深めていった。その過程で私たちは、台湾における多様なエスニック・グループの存在に興味を持ったため、台湾のエスニック・グループについて合同ゼミの準備を進めた。そして、その後台湾のエスニック・グループについての文献調査を行い、彼らは言語的・文化的に異なる特徴をもっているが、いまはそれぞれが少しずつ近づいて来て、新たな「台湾人」のアイデンティティが作られており、それがそれぞれのエスニック・グループのつながりを深めているのではないかという意見を持って台湾研修に臨んだ。その結果、台湾のエスニック・グループについての更に理解を深めることが出来たが、同時に自分自身について、そして日本に存在するエスニック・グループについてはほとんど考えていなかったことに気づかされた。それは世新大学学生たちの活発な議論展開とは裏腹に、私たちは何気ない「アイヌについてあなたたちはどう思う？」という質問に、自分の意見が述べられなかったことがあったからだ。

考えて見ると、私たち一人ひとりと同じ日本という国の中で、全く異なった人生を歩んできた。また、日本にも実に様々なルーツを持った人々が生活している。それならば、台湾の学生一人ひとりが異なる台湾を見ているように、私たちも全く別の「日本」を見ているはずだ。しかし、心のどこかで「日本人なら“普通”こう思うだろう」と考え、「日本」という国、日本人、日本社会を一般化しなければと考え、多面的にみることを忘れていたのではないだろうかと考えた。そこで私たちは、相手のことを知ろうとする前に、まず自らのことを知り、考えるだけに留まらず、自分の意見を持つことの重要性に気が付いた。したがって、私たちは今後、多文化共生を考えるにあたり、まず「自らのことを知り、考え、自分の意見を持つ」ことを心がけ、「日本」を多面的にみられる人間を目指していこうと思う。

お話会（スペイン語圏専攻 大上真帆）

私はアミの方とのお話を通して、次のよう矛盾した経験をした。私たちはアミの人たちのことを「知りたい」と思い今回直接お話しをうかがう機会をもうけていただいたにもかかわらず、アミの方の「私たちのことを知ってほしい」という気持ちに対して私たちはほとんど応えることができなかったのである。

私たちは今回のお話に向けて、どのような質問をどのような順番で聞いていけばよいのかを、日本であらかじめまとめていたのだが、それは質問をしてそれに答えていただくという流れだった。しかし実際は全く違った。会合部屋の扉を開けた瞬間、目に飛び込んできたのはアミの伝統料理の品々。これらはみな、「言葉」によるインタビューより先に、まず自分たちの文化を「体」を通して知ってもらいたいという強い思いから、用意してくださっていたものだったのだ。これに対して私たちは嬉しさの半面、予想外の展開に戸惑いとこれからどうインタビューを進めるかという不安を抱いていた。なぜなら私たちはインタビューを「言葉」という手段のみで進め、そこから学ぼうという考えが頭を占めていたからだ。そのため料理を「歓迎のために用意してくださったもの」として頂いた気持ちの方が大きく、アミの方が用意してくださった真意を理解できていなかった。

そして料理を頂いた後インタビューが始まり、私たちは質問を順番に訊いたのだが、ここに大きな反省点がある。質問が一原住民としての答えとアミの方自身の答えのどちらを求めたものかが不明確だったのだ。だからアミの方から「あなたたちは本当に知りたいことは何なのか」と何度か指摘されてしまうこともあり、またインタビューの最後には「もっと深い話をするのだと思っていた」と言われてしまった。

このようにお話全体を通して、アミの方の「知ってほしい」「通じ合いたい」という気持ちに伝えることができなかったことを実感した。そしてその原因は私たちがただ漠然と知りたいことを質問するだけで、「私たちが最終的に何を求めて質問しているのか」や、「私たちの中にどういう考え・気持ちがあって質問しているのか」というのをアミの方に伝えきれていなかったことにあると私は考える。

このお話から「知る」という手段は五感を伴うものであり、「知る」には何を知りたいのかを自分でもそして相手にも明確にしておく必要があると感じた。今後コミュニケーションにおいてこの学んだことを活かし、積極的に「自分から相手を知る」姿勢をもっていきたい。

### 合同発表に向けた準備：結婚班（国際関係学科 菊地茉理）

私たちの班は「結婚」をテーマに選んだ。なぜ「結婚」かという、台湾について勉強していく中で、台湾人と中国人の結婚はいわゆる「国際結婚」なのかというひとつの祖素朴な疑問から、台湾人はどこまでを国際結婚とするのか、違う民族同士の結婚例はどれくらいあるのかという疑問が生まれ、結婚はそもそもお互いの民族文化の影響が強く表れることから、民族の境界を考える上で大きな役割を果たしているのではないかと考えたためである。

台湾の結婚に関する文献にあたり、台湾の結婚には原住民、漢族、客家人、閩南人、外省人、本省人、大陸人、新移民など多様な組み合わせの婚姻が存在することが分かった。それぞれの歴史背景を把握することや、各民族がそれぞれの民族に対してどのような考えを持っているのかを捉えづらいたところが難しく感じた。先生方に台湾人の院生の方を紹介していただけてお話を伺ったり、アルバイト先の中国人の方のお話を伺ったりしたことで理解を深めることはできたが、もちろんそれが各民族を代表する考えではない。合同ゼミで同じ台湾人でも意見がまったく異なっていて、個人個人のバックグラウンドによって考え方も様々であった。

プレゼンテーションの作成は、グループでの作業ということで、私には初めての経験だった。そのため不安も大きかったが、自分1人で作業する時には得られない多くの意見を聞き、良い刺激となった。合同発表に向けた準備期間の中だけでも、台湾研修に参加しなければ出会わなかっただろう方々と出会い、多様な考え方があることを知り、またひとつの作業を通じて協力して達成するという充実感を得ることができた。この経験から、もっと様々な人と関わりたいと感じるようになった。

### 合同発表に向けた準備(ドイツ語圏専攻 三浦加奈絵)

多様なエスニシティから成る台湾に生きる人々は、複雑な台湾社会と民族意識をどのように捉えているだろうか。こうした疑問から我々のグループは「Taiwanese-ness(台湾性)」をテーマにプレゼンテーションを組み立てることにした。この問題では、日本統治や中国による政治的支配というナショナルな内容だけでなく、個人の民族的背景にも触れることになる。そのため、微細な用語の区別や表現の仕方に気をつけねばならなかった。また、歴史、政治、時代ごとのイデオロギーに対しても十分に意識的になる必要があった。

しかし「台湾人アイデンティティ」ないし「台湾性」という問題の重要性は理解するにも、学生相互に考えを膨らますにも容易なものではなかった。くわえて、研修に参加する学生は、就職活動などで多忙な日々を追われていたため、グループで集まる時間もなかなかとれなかった。そして、中間発表ではパワーポイントもレジュメも用意できず、準備の不十分さを露呈する結果となってしまった。

その後、先生方や学生から多くの厳しいご指摘を受けた。出国まであとわずかという折に我々はまた一から台湾について考え直すことになった。

現地の学生の関心を引きつけ、率直な意見を聞き出すために、我々はまず自分たちのことや日本について述べ、日本と台湾の対比から「台湾性」についての議論を導くことにした。日本にもアイヌや琉球といった特異な文化が存在し、元来の関心のきっかけであった「日本にはない台湾の民族的多様性」という考えそのものを問わねばならなかった。さらに、在日朝鮮人や日系ブラジル人など複数の民族的背景を持つ人々も多数存在し、日本社会に多様性を与えていることを改めて強く認識した。

台湾・台湾人という他の社会について考えることは、自国の民族および文化の多様性に目を向けることであった。研修のメインである世新大学でのプレゼンテーションは、いわば我々自身の鏡として機能し、我々自身と周りの多文化共生を見つめ直させる目的を孕んでいたのである。

### 合同発表でのプレゼンおよび議論（結婚班）について（国際関係学科 大谷麻衣子）

私はプレゼンテーションおよびディスカッションを通して、立場の異なる相手とコミュニケーションをとるために大切なことを学んだ。すなわち、相手を知りたいという意味を伝えることと、それを聞く姿勢である。

私たちは台湾の学生とよりよい議論をするため、本番直前まで幾度となく発表の練習をして改良を重ねた。専門用語はどの言語を使えば伝わりやすいのか、民族という枠を越えた結婚という台湾の人々の抱えるデリケートな問題に触れるにはどのように議論を進めればよいのか、逆に相手方からはどのような質問が飛んでくるのか等、私たちは一つひとつをじっくりと考えてプレゼンテーションを作り上げた。

しかし、いざ本番となると予想外のことがいくつもあった。なかでもとりわけ驚いたことは、議論の場に私たちの想定よりも多様なバックグラウンドを持つ学生——アミ族の父と閩南民系の母を持つ女性、タイヤル族の祖父と客家系の母を持つ男性、客家系の恋人を持つ閩南民系の女性、タイからの移民女性など——が



集ってくれていたことだ。「結婚」をテーマに扱った私たちにとってこれほどありがたいことはなかったのだが、準備の段階ではこのような様々なルーツを持つ人々のことを自分たちから遠く離れた存在として認識していたため、どこか表面的な発表になってしまった。

そして私たちは誰一人中国語ができないために英語での発表となったのだが、それでも議論を盛り上げることができたのは、私たちの「台湾の人のことを知りたい」という熱意が、台湾の学生の「自分の意見を伝えたい」という想いに繋がったからだとは私は考える。彼らからは私たちの言わんとしていることを理解しようとする姿勢が伝わってきた。私たちは台湾を知るために台湾の学生らと議論を始め、相手からの協力も大いに得て、言語や文化の壁を越えて話し合うことができた。この経験は、私が今後人びとと繋がるすべての機会において役立つことだろう。

### プレゼンおよび議論（アイデンティティ）（英米学科 坂田智哉）

私が世新大学でのプレゼンテーションで大きく印象に残ったことは2つある。1つは実際に現地に出向く大切さだ。私たちは日本で本や論文を調べ、台湾人は台湾で話されている言語である閩南語に台湾らしさを考えるのではないかと推測し、世新大学のゼミで発表した。けれども、実際に学生の話聞く中で、言語はアイデンティティの指標にならないという意見や、近年他のアジア諸国から流入している「新移民」と呼ばれる人々とその子供たちへの多言語習得の負担、それにより発生しうる差別の問題など、考えていなかったトピックもでてきた。これらは、資料から学ぶだけであった台湾を訪れる前の私たちには気づくことのなかったことだ。現地の生の声を聞くことはとても意義のあることであった。また、世新大学の学生は難しいテーマにもかかわらず、私たちの質問に真摯に答えてくれた。これははるばる日本から来た私たちに応えてくれたのだろう。

2つ目は出会った学生のアイデンティティに対する意識の高さだ。彼らは自分たちのルーツを知っており、また多民族社会に対する関心も高い。台湾のような社会では誰もがマイノリティになりうるということが理由なのかもしれない。一方私は普段自分のルーツやアイデンティティを考える機会などない。日本人の中で育ち、違うバックグラウンドをもつ人々と接する機会が少なかった私が台湾の学生の意見を聞くことはとても新鮮であり、今後一層多文化社会が進む日本に住む私たちは、従来の意識を変えなければならないと感じた。マジョリティに属する私は、アイヌや沖縄の人々のような少数民族を尊重し、彼らに対する関心を深めるべきだと感じた。こう考える機会を得たことができたことをうれしく思う。

### 文献

- 鈴木正弘、「清末の歴史教科書におけるナショナル・アイデンティティ」『歴史教育史研究』9:24-55.  
 夏剛、2003、「中国、中華民族、中国人の国家観念・民族意識・「国民自覚」」、中谷猛、川上勉、高橋秀寿編『ナショナル・アイデンティティ論の現在』晃洋書房、115-142.  
 樋口靖、2012、「領台初期の台湾語教学（一）」『文教大学文学部紀要』25(2):23-40.  
 若林正文、2001、『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ』筑摩書房

<sup>1</sup> 世新大学社会発展研究所のサイトより ([http://e62.shu.edu.tw/eng/eng\\_intro.html](http://e62.shu.edu.tw/eng/eng_intro.html))

<sup>2</sup> 同上。

<sup>3</sup> 台湾では法的にも先住民族を「原住民族」と呼ぶ。また、「先住民」という呼称以上に先住性をより強調するものであり、日本語にみられる軽蔑的な意味も有しない。

<sup>4</sup> 「インター・アジア研究国際修士プログラム」については、下記の動画でも紹介されている。 (<http://www.youtube.com/watch?v=MtTP3jnPnQU>)

<sup>5</sup> 樋口によれば、台湾語（閩南語）の定義は以下のようなになる。「台湾語は学術上は中国語の方言である福建方言のさらに下位方言の福建南部方言の1変種として扱われるのが普通であり、現在の台湾では閩南語もしくは閩南方言とか、あるいは福建以外にも広東省、海南省、東南アジア各国に広がった福建南部方言と区別して台湾閩南語のように呼ばれることも多い。」（樋口 2012:28）。